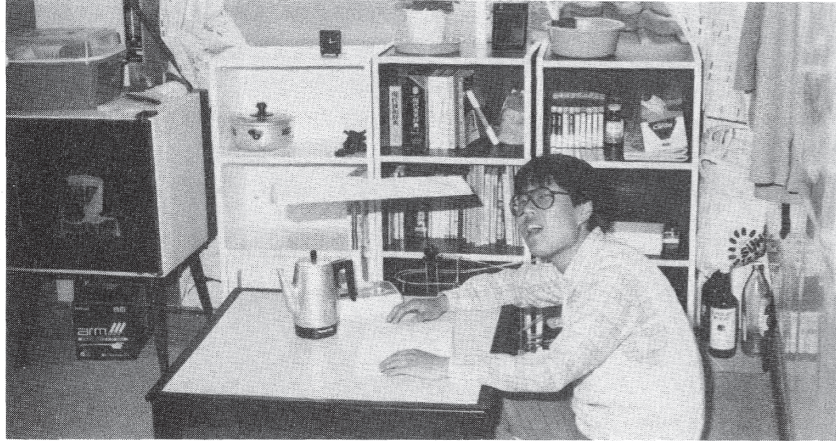


復刻 素敵 空 間

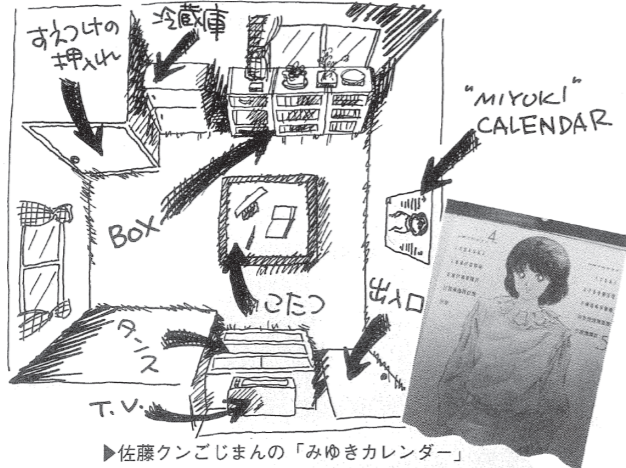
では、2回生諸君きみたちの新鮮で、ちょっとユニークな部屋を見せてくれないか

時代は変わった。しかし、新生活に馴染んできた新入生が自分の部屋を改装したくなるのがこの時期であることは、きっと今も変わらない。この記事はそのヒントとしてもらえれば幸いだ。なお、この記事のデザインは当時を再現している。(でこぼん)

昔 1984



▲同じ下宿の友人・古浜くん



▶佐藤くんごじまんの「みゆきカレンダー」

余裕たっぷり・シンプルですね

まずは工学部の佐藤暁君。8畳-αの広さがあるので、レイアウト上の苦労は特になかったようです。まだ家具も少ないので、余裕たっぷり。グレーのカーペットに、窓の高さにあわせたボックス、そしてユニークな姿の冷蔵庫と、シンプルながら味のあるコーディネートです。部屋の自慢は？の問いには「みゆきのカレンダー」との答えががえってきました。今後欲しいものは、ロッカーと机だとのこと。トースターが見当たらないので聞いてみると、最近朝食抜きで夜2食だし(い

けませんね)、必要な時は同じ下宿の古浜君から貸りるそうです。この2人、修験館高校で2年生の時同じクラスだったのにその後消息が知れず、身体検査のため上洛する新幹線の中でバツパリ会い、「お前も京大か」と言ったらなんと決めた下宿まで一緒だったという偶然。古浜君の部屋にはテレビを置いてないので、時々佐藤君のところに会いに行くそうです。1人なんでもそろえようと思ったら大変だし、近くの人と物を貸し借りするのはとても賢い、重要なことだと思います。

昔と今 比べてみた

※「昔と今」というより、個人間の違いかもしれませんが

◎布団とベッド、どっちがいいの？
1984年の佐藤さんはおそらく布団ユーザー。そこで、一人暮らしには布団とベッド、どちらが良いのか検討してみたい。

今回取材した2人の家はどちらもベッドで、その下のスキマを収納スペースとして活用していた。まさゆき君曰く「ベッドなら寒さや音、床のほこりなども気にしなくて済む」とのこと。一方、布団は片づけさえすれば部屋を広く使えることが強み。友達も沢山呼べることだろう。布団を収納するクローゼットの大きさや、ベッドや布団を置いた際の部屋の広さも考慮に入れながら、検討すると良いかもしれない。

◎こたつとエアコン、どっちがいいの？

1984年の佐藤さんの家にはあったこたつは、2024年の2人の部屋にない。

底冷えする京都において、どの暖房器具を購入するかは重要な問題だろう。電気代は、実はエアコンよりこたつのほうが安く済むことが多い。座卓として年中使えることも強みだろう。しかし、こたつに入ってそのまま眠りに落ち、風邪を引いてしまう……というようでは本末転倒だ。こたつから抜け出せる強靱な意志の有無が、暖房選びの分かれ目かもしれない。

◎防災意識の芽生え

2024年の2人の家には、もれなく防災用品が備えてあった。備蓄食料やペットボトルの水、懐中電灯などは、カバンや箱にひとまとめにして、できるだけ準備しておきたい。

◀『らいふすてーじ』創刊号の本企画。「みゆきカレンダー」に時代を感じる(1984年6月1日発行)

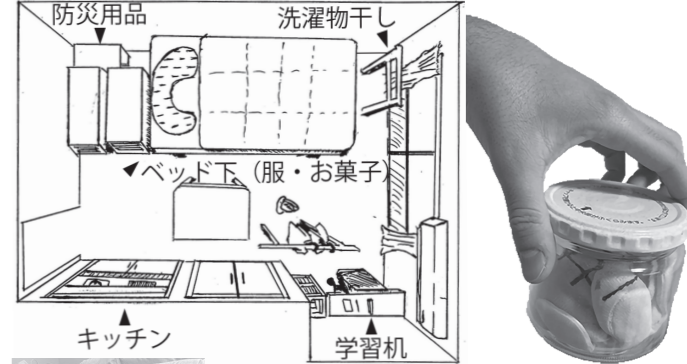
デッドスペース・マイスペース・自分だけの小宇宙

諸君、「狭苦しい」とワンルームを侮るなかれ。古今東西、一人暮らしと言えばワンルーム。そこに工夫の余地がないはずがない。

家では裸足だという農学部のみさゆき君。彼がそれはくつろいだ様子で快く迎え入れてくれた部屋は、「ワンルームは狭すぎる」なんて常識をひっくり返すものだった。特筆すべきは、デッドスペースの有効活用法。ベッド下にシンデレラフィットで並ぶ数々の引き出しそれぞれに、お菓子や洋服、布団などが詰まっている。よく使うものを前へ、あまり使わないものを後ろへ。シンプルゆえか、それぞれのものの定位置が手に取るようにわかる彼の部屋は、宇宙の秩序を感じさせる。そのハーモニーはベッド下だけに留まらない。それは少し出っ張った空間にフィットした学習机であり、ベッドの横に隙間なく並ぶ引き出しでもある。ありとあらゆる空間に凝らされた工夫が、一人暮らしを始めて1年経った今でも、彼の「小さなワンルーム」のお部屋にクローゼット2つ分もの余裕を残している。

しかし、神経質にすべてをフィットさせようと躍起になりすぎると、逆に疲れてしまうだろう。そこで彼から学ぶべきもう1つの教訓が、適度にテキトーな暮らしをすることだ。まさゆき君は、ゴミをそのまま指定のゴミ袋に捨てるスタイルで、ゴミ箱をもたない。

「ゴミ箱は実家に送り返したんです」いたずらっこのような無邪気な笑顔がまぶしい。頑張りすぎず、もっと気楽に。長いこと一人暮らしに臨むのだ、肩の力を抜いてかかることが大事かもしれない。



まさゆき君が物心つく前から一緒にいるカメさん。ボロボロになって中身のそばがらが出てきても、ビンに入れて新天地、京都まで連れてきた▲
◀ベッド下にシンデレラフィットするボックスたち。彼の洋服、好きなお菓子が詰まっている

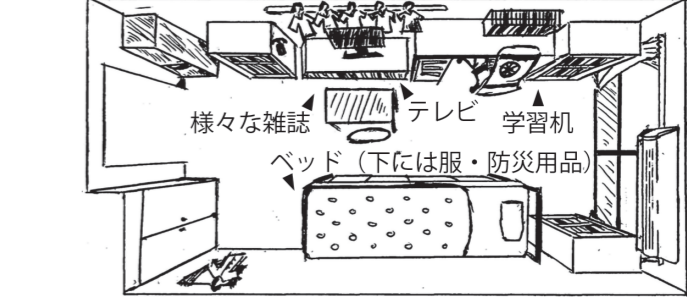
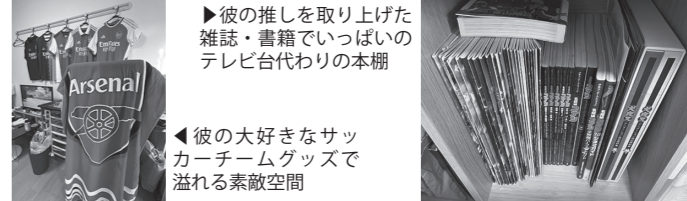
SHOW ME YOUR趣味、正味君の好きなように

大学生になって、趣味に使う時間もお金も増えた、という人も多いかもしれない。自分の大好きなものを上手いこと部屋に織り込んだ好例が、工学部のかまくら君のお部屋である。

十分な広さがあったため、収納の面では特に工夫などしなかったと言うかまくら君。しかし、それは嘘だ。ベッド下のスキマを活用したボックス収納に、壁や棚の側面を利用した吊り下げ収納など、随所に工夫が凝らされている。さらに洗濯物干しに至っては、ベランダの物干し竿と地面との間にズボンを干す十分な高さがなかったため、つかえ棒でお風呂場に新たな干すスペースを作ったようだ。

とはいえ、やはり鮮烈な印象を顔に残すのは、彼の圧巻のコレクション。一度これを見れば、数々の収納の工夫など簡単に忘れてしまうほどだ。部屋に入ってすぐに目についたのは、彼が愛してやまないサッカーチーム、アーセナルのユニフォームたち。鮮やかな勝負服が、備えつけのハンガーラックを利用して見事にディスプレイされている。テレビ台代わりにしている棚もまた圧巻だ。横倒しにした本棚に、推しのサッカーチームを取り上げた雑誌、好きなアニメの画集・設定集、京都の観光誌などがぎっしり詰まっている。例えば、『名探偵コナン』は劇場版パンフレットを1作目から直近の

ものまでしっかりコンプリート。「もはや宗教だと言っても過言ではない」と推しへの愛を語る彼の部屋は、大好きなもの、心ゆくまで濃密な時間を過ごせる、まさに彼だけのパラダイスであった。



▶彼の推しを取り上げた雑誌・書籍でいっぱいテレビ台代わりの本棚
◀彼の大好きなサッカーチームグッズで溢れる素敵空間